

社研に関する雑感

麻 島 昭 一

『社研月報』がまた節目を迎えることになった。まず400号を越えることになった長い歴史を祝し、それを支えてきた多くの所員の努力に敬意を払いたい。過去を探れば、「月報」は100号刻みに記念号を組んできた。今回たまたま投稿したら、400号が割り当てられ、奇しくも拙稿が掲載されるという巡り合わせになってしまった。私だけがラウンドナンバー号を貰ったという珍しい存在となり、私自身にとっても500号の時はもはや社研メンバーから姿を消しているであろうから、一回限りの貴重な(?)実績といえよう。拙稿が400号を汚したといわれれば黙るしかないが、その代わり本号で何か書かねばならぬ巡り合わせになっている。

さて私は300号と400号の間に、立派だった三輪所長の後を受けて、第9代所長の職を汚した。前任者の10年から較べれば4年間は短いといえるが、それなりの思い出を二、三記そう。

第一は、社研月報そのものについてである。ひと頃原稿がなくて定期刊行が苦しく、やむを得ず月報形式をやめ、「所報」と改称し、原稿があり次第の不定期発行にしようかと事務局会議で検討したことがある。気軽に、早く発行できるメリットは残るからと主張したが、「月報」へのこだわりは特に年配者に多く、もう少し続けることになった経緯がある。記載された発行日と実際の発行日が大きくずれることはあったが、何とか持ちこたえて今日まで来たのだから大したものである。とにかく歴代の編集子、ご苦労様でした。

第二は、社研の40年史を編集してよかったと思っている。社研の原点と過去の苦勞を知って、私自身、社研の認識は大いに深まったし、社研のことを調べる時に結構役立つからである。私が企業社史作成を頼まれ、研究上社史を利用する立場からの発想であったが、すでに40年を過ぎて、時期遅れであったにもかかわらず短期間に強行した。私と一緒にやった方々にはさぞ迷惑な話であったろう。

第三は、韓国企業視察、中国企業視察を実現したことである。今でこそ当たり前になったが、計画しても社研所員の大学での外国旅行が本学で許されるのか、初めてのことで不安があった。参加者全員に万一のことがあれば本学は大混乱?のリスクも考え、初回では現地集合・現地解散でリスクを分散したが、2回目は図太くなって全員行動であった。結果的に何の事故もなく幸いであったが、それが3回目のベトナム行につながるの嬉しいことである。

そのほか、共同プロジェクトを組まなかった代わりに、内部問題を処理すべく努力し、社研組織・運営方法の変更、規約整備、電動書架の導入も実現できた。

要するに、所長時代に所員のご協力のお陰で、微力なりにいくつかのことを果たせてよかったと思っている。今後、社研の益々の発展を願うものである。